
クローバーホテル殺人事件

蓮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバーホテル殺人事件

【Nコード】

N0015R

【作者名】

蓮斗

【あらすじ】

幼なじみと楽しいはずのスキー旅行。

しかし、和真が泊まったホテルで殺人事件が起きてしまう。更に、

犯行は繰り返されるような文字が書かれていた。

警察関係者も、探偵もない。

和真は犯人を自分なりに見つけようと奮闘する。

旅行

数十年前、北海道のとある町で、あるブロンズ像が発見された。

——天使の姿をしたその像には黒い羽が四つあった。

天使の姿から、ある人は神聖な物と言い、またある人は、黒い羽を見て不吉な物と言った。

それはかなり年代物のようで、歴史的価値があると、当時はマスコミが殺到し、観光客で賑わった。

しかし、時が経った今となっては、その像の事など、世間からは忘れ去られていた……

「楽しんでこいよ！」

光一はそう言って和真と美穂を送り出した。

和真と美穂、そして光一は幼稚園からの幼なじみ。

有給を取って三人での旅行計画も、光一に急な仕事が入り、しかたなく二人だけで出掛ける事になってしまった。

「光一楽しみにしてたのに残念だね……せっかく三人で休み合わせたのに」

「しょうがないだろ、仕事なんだから」

目的の町に着くまでの間、美穂はしきりに光一の話ばかりしていた。

和真も光一が来れない事は残念だった。しかしそれ以上に、美穂と二人きりで旅行に行ける事に、妙な緊張感を覚えた。

幼なじみだからと、特別変な意識は持たないようにしてきたが、こうして二人つきりになると、いやでも意識してしまう……和真は

町に早く着いてほしいような、そうでないような感じでバスに揺られていた。

バスに乗って三時間。二人は目的の町に到着した。冬になるとこの町は、スキー目当ての観光客がやって来る。

ただ、ゲレンデが町のはずれにあるため、それ目的の人の数はそれほど多くなかった。

「何だか寂しい所だな。どうせならもっと良い所にすれば良かったか……」

和真はボソッと文句を言う。

「仕方ないでしょ！ “給料日前だから金欠で苦しい” って言ったの
和真何だから！ 私だってもっと良い所に行きたかったわよ！
普段から貯金とかなしないから後悔するのよ！」

美穂は度々語気を強め、ムスッとした表情で和真を睨む。

「分かってるよ……悪かったゴメン」

そう言われては和真に反論のしようがなく、素直に謝った。

この町にはホテルが二つしかない。和真達が泊まるのは、料金が安い方のホテル。

安いだけあって、町やゲレンデから遠い場所にあった。

町に着いてからバスを乗り換え、ホテルまで更に二十分。途中もう一方のホテルを通りすぎた。

こっちの方がゲレンデに近いな……和真はそう思ったが、さっきの事があるから何も言えなかった。

和真はホテルに着くまで、無言で外の景色を眺めていた。

「やっと着いた。腹減ったな……ケツ痛いし」

ここに来るまでバスに約三時間半も座ったままで、二人はスキーをやる前にもうくたかった。

ホテルに着いて和真が腕時計を見ると、既に昼の二時になっていた。

「荷物を預けて、何か喰うか？」

「うーんそうね。なんかもう疲れちゃったよね。明日もあるんだし」

「ここでいいんだよね？」

ホテルと言うよりも、旅館のような造り。だが、玄関の上には確かに“クローバーホテル”と書いてあった。

ホテルに入ると、すぐフロントがあった。

そのフロントのカウンターの上には、天使のブロンズ像が置いてある。

そのカウンターのすぐ横には広いスペースがあり、そこにはソファやテーブルが並んでいた。

その広間からは二階に通じる階段もあった。

ホテルに入った二人を一人の男が出迎えた。黒いスーツ姿の四、五十歳位の男。短く整えられた髪には少し白髪も混じっていた。

「お二人ですか？ ご予約のお名前は？」

古びたホテルの雰囲気のせいか、和真には出迎えた男性もどこか覇気の無いように感じられた。

「二人です。佐々木です。佐々木和真です」

「佐々木様ですね？ お待ちしておりました。私はこのホテルのオ

「ナーの佐藤です。二日間宜しくお願いします」
佐藤は頭を深々と下げた。

「荷物をお持ちします。部屋を案内しますので、どうぞこちらへ」
そう言って二人の荷物を持ち、佐藤は歩き出す。
フロント横の広間を過ぎ、廊下を歩く。

廊下の右側にしか部屋は無く、反対側には数点の絵画が飾られていた。部屋数は全部で五部屋と、それほど多くなかった。

佐藤は一部屋飛ばし、二部屋目で足を止めた。

「このこと、隣の真ん中の部屋です」

このホテルは部屋が狭く、一人用。しかも和真と美穂は幼なじみといえど、男と女。恋人同士でも無い。ということで、あらかじめ二部屋予約していた。

「ありがとうございます。なんかここってちょっと変わった造りですよね？」

あんまりホテルっぽくないっていうか……」

和真はホテルに入ってから感じていた疑問をぶつけてみる。

「ちよっと和真！失礼でしょ！ すいません……」

和真の後ろから美穂が謝る。

「いえ、いいんです。このホテルは元は個人の持ち物だったんです。私がそれを買取り、改装して今のホテルにしたんです」

「従業員も少ないんですか？」

失礼な事ばかり聞く和真に、美穂は恥ずかしそうにうつむいた。

「よくわかりましたね？ おっしゃる通り、景気が悪くて中々人を雇う余裕がないんです……」

淡々とした口調でそう話、また頭を深々と下げて佐藤は行ってしまった。

「和真が変な事言うから、佐藤さん怒って行っちゃったんじゃない？」

眉間にシワを寄せながら美穂は怒っている。

「だって気になったんだもん、しょうがないだろ……
それより、どっちにする？」

「どっちって何が？ スキーより先に、ご飯食べようって言ったの
和真じゃん！」

「部屋だよ！ 部屋！ この部屋と、隣の真ん中の部屋どっちがいい？
お前決めて良いよ！」

「待って！ 中見てから決める！」
そう言って、美穂は部屋の中を交互に覗いた。

「うーん……どっちも同じ造りみたい。置いてある物も変わらない
し、私こっちで良いわ」

そう言って美穂は二番目の部屋に入っていった。

客人

和真は真ん中の部屋に入る。

見た所、家具はシンプルな物ばかり。

安っぽいシングルベッドに、小さなテーブル。

古い建物のせいか、窓が風でカタカタと震えている。

「――この窓大丈夫か？」

こんな真冬の時期に窓が壊れたらたまったもんじゃない。

だいたい何だこの像？ インテリアのつもりだろうが、あんまり

良い趣味じゃないよな……

和真はテーブルの上に置いてあった天使の像を手にとってみる。

赤褐色の体に黒い羽。天使の像のようだが、その黒い羽が不気味さを演出している。

羽も多すぎだろ。普通天使って羽二つじゃないのか？ 四つもあるなんて、こんなの誰が作ったんだ。

次から次へと文句を言いたくなってくる自分に嫌悪感を感じる。

ここに泊まることになったのは自分のせいなんだ。

悪い所を探すのはもう止めよう。キリがない。

――うん、カーペットは意外とフカフカだ。

でもそこだけだな良い所は……

部屋の中を一通り見て、和真は軽いため息を吐く。

「おい！ もういいか？ 飯喰いに行くぞ！」

壁越しに大声で美穂に呼び掛ける。

「――もうちょっと待って！」

全く、女って奴は何故そんなに用意が遅いんだ。
それにこの部屋、壁越しでも声が聞こえる……
まさかと思ったが、ここまでボロいとは。
やっぱり貯金は大事だ。来月から貯金始めよう！
和真は心の中でそう思った。

美穂を待つ間、和真は何をするわけでもなく、ただぼーっとして
いた。

何気なく外を見ると、窓を揺らしていた風に雪が混じり出してい
た。

「ごめん！ 待った？」

謝る言葉とは裏腹に、悪びれた様子は無い。

「待ったよ！ っていうかノックぐらいしろよ！ それに、別に悪
いって思っていないだろ？」

「それよりさ、外見た？」

「ん？ ああ、雪降ってきたな」

「やっぱスキーは明日にしようか。そろそろ暗くなるし」

「そうだな」と、和真は美穂の意見に賛成し、二人は部屋を出た。

「でもどこで喰う？」

「うーん……佐藤さんに聞いてみよっか」

カウンターにいる佐藤に話を聞こうとしたが、彼は誰かと話している。

どうやら他のお客が来たようだ。

その客が和真達に気付き、声を掛けて来た。

「あんたらもここだったんだ！」

歳は和真達と一周り違うであろう、三十代後半の男。

“あんたらも”と言ったのは、和真達が町まで来たバスに、この男も乗っていたからだ。

「俺は野口って言うんだ。まあここで会ったのも何かの縁。仲良くしようや」

そう言って手を差し出し、少し強引に二人と握手を交わす。

「はあ……よ、宜しく願います」

変わった人だな……それが二人の野口の印象だった。

「それでは野口様、お部屋へご案内致します」

佐藤は野口の荷物を手に取り、今度は階段を昇っていった。

「あっ！……ご飯食べる場所聞くの忘れたね」

「あっ！……忘れてた」

二人は知らない場所を歩き回るより、佐藤に聞いた方が早いだろうと思い、フロント横の広いスペースにあるソファーに腰掛け、佐藤が降りてくるのを待った。

そんな時、玄関の外に黒い高級車が止まった。

寂れた町に、古びたホテル。ここがそんな場所だから凄く目立つ

た。

車から荷物を持った二人の男女が降りた。そしてホテルの方に向かって歩いて来る。

「あの人達もここに泊まるのかな？」
美穂は不思議そうに和真に尋ねる。

「荷物を持って降りてきたって事は、たぶんそうなんだろうな。金持ってそうなのにな」

和真はそう言ってハツとする。

自分が今言った事は、裏を返せば、“このホテルに泊まる奴は金を持っていない”という意味になるからだ。

慌てて、「きつとこのホテルも良い所なんだよ」と訳の分からないフォローを入れる。

そんな事を言っていると、お金持ちそうな二人はホテルに入り、和真達に近付いて来た。

おそらくフロントに誰もいなかったからだろう。

「すみません……佐藤さんは何処にいるか分かりますか？」

高飛車そうな見た目と違い、腰の低い男性。

佐藤さんと名指ししている事から、彼はどうやら知り合いのようだ。

「佐藤さんですか？ 今お客さんを二階に案内してますけど」
丁寧な男性の態度に、和真も思わず立ち上がって対応しよう。

「そうですか、じゃあここで待ってようか」
男の意見に女も頷く。

佐藤が降りてくるのを待つ間、四人は互いに軽い自己紹介を済ませた。

男の名前は渡辺卓也、三十歳。

毎年この時期になるとこのホテルに泊まっているらしい。

そしてその妻、渡辺千鶴ちづる三十歳。

性格の良さそうな気品ある女性。

まさに美男美女。お似合いの夫婦だ。

佐藤が階段をゆっくりと降りてくる。

そして渡辺夫妻に気付き、軽く会釈した。

「渡辺様お待ちしております。三名ですよね？　ただ、電話でお話した通り、部屋が離れてしまうんですけどよろしいでしょうか？」

「ええ構いませんよ。私は部屋にこもりきりになるので」

卓也はノートパソコンの入ったバッグを見せながら言った。

三名？　あと一人は？

和真がそう感じた疑問はすぐに解消される。

玄関のドアを開け、荷物を持った若い女性が入ってきたからだ。

卓也の秘書兼運転手、小林紗英。和真達と同じ年の二十四歳。あの高級車は彼女が運転していたようだ。

そして、卓也は一階の和真の隣の部屋に、妻の千鶴と秘書の紗英は二階に案内された。

その後、ようやく落ち着いた佐藤に昼御飯の話をする二人。

しかし、ご飯屋は町まで行かないと無いらしく、代わりに佐藤が軽食を用意してくれた。

古びたホテルの広間で食べるサンドイッチ。
和真はお腹が減っているせいか、ただのサンドイッチがやけに美味しく感じられた。

歓談

軽い昼食をとった後、二人はそのまま広間でくつろいでいた。玄関の外を見ると外は吹雪になっていた。

「おい！ 外見ろよ、吹雪いてるぞ！」

「明日スキー出来るかな？」
心配そうに美穂が聞く。

「いやーすごい雪だな」
独り言にしては大きい声で、野口が階段を降りて来る。
そして、和真達を見るなり話しかけて来た。

「おっ！ なあ、あんたらはスキーしに来たのかい？ この分だと明日は無理っぽいな」

「やっぱり無理っぽいですよね……」
残念そうな美穂。

「まだ明日になってみないと分かんないだろ！
やっぱり野口さんもスキーですか？」
今度は和真が野口に質問する。

「いや、俺はあの像を見に来たんだ」
カウンターの上にある天使の像を指差して言った。

「あの像を？ 何なんですあれ。部屋にも同じのが置いてましたけど」
不思議そうに和真が聞いた。

「まあ普通の人は知らないよな。あのブロンズ像は今から数十年前に、この町で見つけたんだ。この像が見つかって、町は相当観光客が来たらしい。」

ほら天使に黒い羽が四つ付いてるだろ？ 幸運を呼ぶ事からヨツバのクローバーにかけてこう呼ぶようになったんだ。

四つ羽の黒羽よつばくろばってな。

当時は結構マスコミとかが騒いだらしいんだけど……

ここにあるのは全部レプリカだし、今となっては俺みたいなマニア位しか見に来ないけどな」

「えーでも黒い羽ってちょっと不気味ですよね」

美穂は露骨に嫌そうな顔をした。

「そうか？ 俺は意外と興味あるよ。 なんか謎めいた感じがいいじゃん」

和真は軽い気持ちで言ったのだが、

「おお！ 分かる？」

よほど周りに理解者がいないのか、野口は物凄く食い付いて来た。

延々とクロバの像について語る野口。

美穂の方はと言うと、野口の熱弁中に、二階から降りてきた千鶴と紗英と盛り上がっている。

——女の子同士楽しそうだ。会話の内容も少し気になる。

和真は野口の話に愛想笑いと、適当な相づちをしながら、美穂達の会話に神経を集中させる。

「千鶴さんは結婚してみてどうですか？ 何か嫌な事とかありましたか？」

結婚？ 美穂は結婚に興味があるのか？ 誰だ？ 相手は誰だ？
益々気になる和真。

「うーん……嫌な事って言えば……が……になったことかな」
そう言って千鶴は笑った。

「美穂ちゃんはどうなの？ 彼は恋人なんですよ？」

「違います！ 幼なじみです！」
美穂は慌てながら否定する。

「じゃあ好きな人とかいるの？」
質問を変え、千鶴は美穂に聞いた。

「和真君聞いてる？ いい？ クロバの像より凄いのがね……」
少し黙ってくれ。いつまで喋るんだこの人。今大事な所なんだよ
！ うるさくて聞き取れないじゃないか。
和真は相づちを打ちながら、心ではそう思っていた。

「えっ……ええまあ。でもその人と結婚したら、千鶴さんと似たよ
うな感じになっちゃいますね。
その人“S”だから……私も……になっちゃうんですね」

「えっ!？」
こいつらどんな会話してんだ？ 相手は“S”って一体どんな奴
なんだ？

和真は変な想像をしてしまい、思わず“S”と言う言葉に反応し
て声を出してしまった。

「和真君、驚くのはまだ早いよ！ 更に凄いのがね……」

野口さん……あんたに言ったんじゃないんだ！
それにこの人、一体いつまで喋るんだろ？

和真は美穂達の会話が気になる。しかし、野口のマニアックな話がそれを邪魔する。

チラッと腕時計を見ると、もう六時になっていた。

結局二時間もの間和真は、像の魅力について聞かされた。

まだ止める気配も無い。

そんな時、佐藤が近付いて来て言った。

「皆さんそろそろ夕食にしたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

「よろしいです！」

真っ先に返事をする和真。

正直サンドイッチを食べたばかりで、お腹は空いていない。ただ、野口の話から逃げたかったただけだった。

このホテルの夕食は、宿泊客が食堂に集まり皆で食べる事になっていた。

食堂は広間を過ぎてすぐ横にあった。

佐藤が声を掛けたのだろう、皆集まって来た。

料理は佐伯と言うシェフが作ったらしいが、その場には顔を出さなかった。

和真は料理には期待していなかったが、予想以上の出来に満足した。

もうさっきの野口の話のを忘れるくらい、楽しい一時を過ごした。

殺人

『ドンドンッ』

誰かがドアをノックしている。

うるさいな誰だ？

あれ？ 俺いつ寝たんだ？

確か昨日は夕食を食べた後、広間で皆で酒を飲んで……

眠気からか、体にまだ酒が残っているせいか、和真は自分が寝た時の記憶をすぐには思い出せなかった。

眠い目を擦りながら、時計を見る。

まだ六時だぞ！？

何でこんな朝早くから起こされなきゃいけないんだ……和真は寝ている間にずれ落ちた布団で、もう一度体を覆った。

「和真起きて！ 大変なの！！」

聞き覚えのある声。

何だ美穂か……

「何だよ！ まだ六時だぞ！ せっかくの休みに何で起こすんだよ！！」

「いいから早く起きて！」

大きい声を出しすぎたのだろう。美穂は声を枯らしている。

「わかったよ」

和真は渋々布団から出て、寝癖だらけの頭をかきながらドアを開ける。

「何でそんなノンキなのよ！ 千鶴さんが大変なの！」

「だからどうしたんだよ？」

「千鶴さんが部屋で死んでるの！」

「はっ？」

何を言ってるんだ？ 何だこれ？ 夢か？

和真は状況を理解できずに、少しの間ドアの前で呆然と立ち尽くす。

「いいから早く来て！」

美穂は強引に和真の腕を掴み、千鶴の部屋に連れて行く。

すでにそこには皆集まっていた。

中には昨日の夕食時にも姿を見せなかった人もいる。

頭から血を流した千鶴の前では、卓也がうなだれ泣いている。

「やっと起きてきたか」

和真に声を掛けてきたのは野口だった。

「何があったんです？ どうしてこんなことに……」

和真は血を流し、動かない千鶴を見ても、未だに信じられなかった。

スーツ姿の佐藤が振り返り、状況を説明する。

「卓也さんが千鶴さんの部屋に行っただんですけど、鍵がかかっていて、反応が無かったので私の所へ来たんです。」

それでこのマスターキーで鍵を開けたんです……そして中に入ったら……」

佐藤はその先の言葉を濁した。

窓の外は相変わらず吹雪いている。

血を流して死んでいると言うことは、事件か事故か。

もし事件なら一体誰が？

この場にいる誰もがそう思った。

ただ一人犯人を除いて……

「それで警察には？」

和真は誰に言うわけでは無く、問いかけた。

「それが……昨日からの大雪ですぐには来れないそうなんです……」
佐藤の声は微かに震えている。

「そんな……」

和真も言葉を失った。

「それと……現場を荒らさないようにとおっしゃてました。

ですからこの部屋は鍵を掛けておきますので、皆さんは広間の方へお戻りください」

「あっ！ 鍵って言えば、千鶴さんが持っていた鍵は何処にあるんですか？」

和真は部屋が密室になっている事が分からなかった。ただ、千鶴の鍵が誰かに持ち去られていたのなら、その謎が解明出来ると思った。

「それが……ほら部屋の隅見てみろよ。あそこに落ちていたんだ。それと……血の付いたクロバの像の羽が一枚取れていたんだ」

野口がテーブルの上にある像を指差して言った。

「血？　それが凶器ですか？」

和真が野口に尋ねる。

血が付いている事から多分それが凶器だろう。そして、それで殴った拍子に、像の羽が取れたのだろう。そう思った。

「おそろくな。まあ凶器かどうかは詳しく調べなきゃ分からないが。それに……取れた羽に文字が書かれていたんだ」

「文字？」

「ああ、白いマジックで“一人目”ってな」

「一人目？」

和真は言い表せない恐怖を感じた。一人目と言う事は、これからも殺人が続く……それを予言しているかのようだった。

「とりあえず広間へ戻りましょう。後は警察にお任せした方が良くんじゃないですか？」

そう紗英に促され、皆広間に戻った。

しばらくすると、佐藤と卓也も降りて来た。ただ、その足取りは重い。

「社長大丈夫ですか？」

そんな紗英の言葉にも反応しなかった。

沈黙の時間が続く。皆口には出さないが、お互いを疑っている。外は吹雪。誰かが来れるような状況では無い。

つまりそれは、この中にいる誰かの犯行ということになる。

「すみません……少し一人になりたいので、部屋に戻ってもいいで

しょうか？」

卓也が憔悴^{しょうすい}しきった顔で言った。

「ええ皆さん宜しいですよ。でも部屋に鍵は必ず掛けて下さいね」

佐藤は皆に了解を得て、卓也を部屋に連れて行った。

「ありがとうございました。何かあったら紗英の携帯に連絡しますので」

卓也は佐藤に一礼して部屋に入ってしまった。

佐藤が広間に戻ると、ここに皆でいた方がいいのか、部屋に戻った方がいいのかと言う議論をしていた。

「ここにいた方がいいって！ 誰が殺ったか分かんないんだぜ？ だったらお互いに監視してた方が良くないか？」

野口はそう力説している。

「でも鍵を掛けていれば部屋にいても大丈夫じゃないですか？ 私も出来れば一人になりたいです」

美穂が反論する。

そんな口論の最中、和真だけは犯人について考えていた。

誰が犯人か分からない。皆怪しく見える。

でも千鶴さんが殺された時、変な物音とかなかったのだろうか

……

誰も聞いていないってことは、とりあえず不審者に襲われたわけでは無さそうだ。

顔見知り……更に言えば、部屋に招き入れる程親しい人ってことになる。

部屋に入った犯人が、隙を見て千鶴さんを殺した。おそらく悲鳴

を上げられない程一瞬で。

ただ、犯行後どうやって鍵を閉めたか……それが分からない。

和真は腕を組み、犯行のイメージを頭で考えていた。

すれと突然紗英が一人の男を指差して言った。

「昨日の夜……千鶴さんと、その人が話しているのを見ました!」

和真達はその男と会った事はない。正確に言えば、さっき千鶴の部屋の前で初めて見た顔だ。

髪を金髪に染めている男。年齢は三十位だろうか。

ジャラジャラとチェーンを付けた黒い革のパンツに、黒い革のジャケットを着ている。

見た目で判断出来ないが、見るからに怪しい。更に、昨日千鶴さんとの会話で何らかのトラブルになったとしたら……

和真はその男を疑う。

「菊地様が?」

佐藤が男の方を向いて言った。

「おい! あんた何で千鶴さん? 知り合いなのか?」

野口が鋭い目つきで菊地を睨む。

「別に知り合いつて程でもねえよ」

菊地が野口を睨み返して言った。

「だったら何で千鶴さん?」

今度は紗英が菊地に詰め寄る。

「だから、お前等には関係無いだろ? お前等警察か? 何で俺が疑われなきゃならねえんだ! 悪いけど俺も部屋に戻らせてもらうからな」

何かを隠しているかのような言動。

だが、菊地はそう言って強引に自分の部屋へ戻って行った。

そんな時、和真のズボンの中の携帯が鳴った。

電話

和真はポケットから携帯を取り出し、皆から少し離れた所へ移動した。

携帯を開くと、幼なじみの光一からの電話だった。

「光一？」

「元気でやってるか？」

電話越しに聞こえる幼なじみの声。

今和真達が大変な状況にいる事を、光一はまだ知らない。

「元気か？」 じゃないよ！ 大変な事になったんだ！」

和真は事件の事を簡単に説明した。

「それで、美穂は大丈夫なのか？ お前がちゃんと守ってやれよ！」

光一の声には力がこもっている。

「分かってるよ。っていうかお前仕事はいかないのか？ もう九時だぞ？」

「ん？ ああ、急な仕事が入ったってのは嘘だったんだ。だから今日は休みだよ」

「はあ？ 何でそんな嘘つくんだよ？」

「氣を利かせてやったんだよ……でもまさかそんな事になってたなんてな……」

でも密室なんて意外と簡単に出来るんだぜ」

「えっ!？」

和真は自分の耳を疑った。

「密室にする事が簡単？　どうやってやるんだよ、教えてくれ!」

光一がそんなに頭のキレる奴だと思わなかった。少しは何か分かるかも、と期待せずにはいられなかった。

「だって、小説とか漫画とかにたまに載ってるだろ？　密室殺人ってさ。

戸や窓に少しでも隙間があれば、糸とかワイヤーとか使って何とかなできるんじゃないか？」

「何だよそう言うことかよ……確か、戸にはそんな隙間無かったぞ？　それにあそこは二階だから、窓は無理じゃないか？」

小説や漫画の中なら出来る事でも、実際にやるとなったらそんなに簡単には出来ないだろう。

それに光一の言うトリックも、あの場所では使えなさそうだと、がっかりする和真。

「でも雪がかなり積もってるんだろ？　犯人は窓から飛び降りたとか？」

「いや、下は俺の部屋だ。雪の上だからって、飛び降りれば音がするだろ？　いくら寝ているからって、そんな音がしたら目が覚めると思うんだけどな……」

美穂に起こされるまで事件の事知らなかったから、本当は自信無いけど。

「そっかじゃあ分かんないな……」

でも犯人は一番怪しく無い人だと思うな。ほら犯人って、“えっ、

この人が？”って奴が多いだろ？」

「だからそれは小説や漫画の話だろ？　それに怪しく無い人ばかり疑ってたら、冤罪だらけになるぞ。

普通は怪しい人が犯人だろ！」

と和真は自分で言って、思った。

怪しい人が犯人。

一番怪しいのは誰だ？

和真は電話しているのも忘れ、無言のまま考え込んだ。

「――俺と電話してる場合じゃないみたいだな？　また電話するわ、とりあえず気を付けろよ！」

そう言って光一は電話を切った。

怪しい人……

マスターキーを持った佐藤さん。

夫の卓也さん。

秘書の紗英。

この三人は、千鶴さんと昨日今日会ったばかりではない。きっと俺等は知らない、何らかの動機があるかもしれない。

それと……昨日の夜に千鶴さんと話していたと言う菊地。　千鶴さんと口論になり、殺してしまったとか……

――ダメだ、いくら一人で考えても動機の一つだって分かんないし。

どう考えても菊地が怪しいけど……
教えてくれるか分からないけど、とりあえず紗英に話を聞いてみるか……

和真は広間に戻り、紗英に話を聞こうとした。

だが、彼女はトイレに行って居なかった……

行方

和真は仕方無く紗英が戻るのを待つ事にした。

「誰？」と美穂が和真に聞いてきた。

「ああ、光一だったよ。大した話じゃないけどな。心配してたよ」
光一がわざと旅行に来なかった事は言わなかった。と言うよりも、
言えなかったのだが。

和真が小さなため息をつき、ソファーに腰掛けると、テーブルの
上に置いてある携帯が鳴った。

「誰か携帯鳴ってますよ!」

和真が目のある携帯を見ながら言った。

「あっそれ私のだわ。誰かしら?」

和真が後ろを振り返ると紗英がトイレから戻って来る所だった。
紗英はテーブルの上にあった携帯を取り、電話に出る。

「社長? もしもし? ……もしもし?」

どうやら電話を掛けてきたのは卓也のようだ。その卓也の声が小
さいのか、無言なのか、紗英は何度も呼び掛ける。

「えっ!? 助けてってどうしたんですか? 分かりました、今行
くから待ってて下さい!」

紗英は慌てた様子で電話を切る。そして、電話の内容を簡単に皆
に説明した。

紗英が言うには、卓也は後ろから誰かに殴られ、部屋で血を流し

ていて動けないらしい。

「殴られた？ 誰にですか？」

和真が聞いた。

「分からない」と紗英は首を横に振る。

「確か卓也さんの部屋は奥から二番目でしたよね？ とりあえず、急いで行ってみましょう！」

和真はそう言って、男の部屋に駆け出した。

殴られて血を流しているだなんて……一体何があったんだ？

和真は疑問と若干の恐怖を感じながら、部屋へ急いだ。とりあえず卓也の状況を把握しないことには、何も答えは出ないからだ。

部屋の前に着き、『ドンドン』とノックをするが、返事がない。

「卓也さん！ 大丈夫ですか？」

和真はそう呼び掛けながらノブを回そうとするが、鍵が掛かっているようで、ドアは開かなかった。

「おい！ 大丈夫か？」

遅れてやって来た野口が心配そうな声をあげている。その野口の後ろからは、皆も走って来ていた。

「鍵が掛かっている開かないんです！ 佐藤さんマスターキー持ってますか？」

和真は佐藤に鍵を要求する。

「いや、私の部屋に置いてあるんです。待っててください今取っ

て来ますから！」

そう言うと、佐藤は自分の部屋へと走り出した。

「ただ事じゃないよな？ 待ってられない、皆で蹴破るぞ！」

野口の意見に皆無言で頷き、タイミングを合わせドアを蹴る。

『ドーン……ドーン！ ガァン！！』

一回、二回と蹴るが、古いくせに中々開かない。三回目であろうやく戸が開いた。

「大丈夫ですか？」

そう問い掛けながら、和真達は一斉に中へ入る。

——しかし、そこには誰も居なかった。バスルームや、クローゼットのの中も一応見てみたが、やはり何処にもいない。

「どうなってるんだ？」と野口が言った。

「イタズラだったんですかね？」

美穂は安堵したような口調で言った。

こんなタイミングでイタズラなんてする訳は無かった。ただそう思いたかったのだろう。

「待って！ 皆これ見て！」

紗英はそう言って、窓の方を指差す。

和真達が視線を向けると、窓ガラスは少し割られ、鍵が開いていた。

更に窓の下には少量の血液が小さな水溜まりを作っていた。

「こ、これは……やっぱり何かあったんだわ……」

美穂の顔は血の気が引き青くなっている。

和真は血溜まりに近付き、ふと窓を見た。

「――鍵が開いてる」

「犯人はそこから入ったのか？」

野口が和真の背後から聞いてきた。

「おそらく……でも変ですよ。」

卓也さんから電話があつて、俺はすぐこの部屋に向かいました。その間誰にも会わなかったし、妙な物音もしませんでした」

「だから？」

野口のその言葉に少しムツとするも、和真は冷静に話し出した。

「部屋で動けないって言ってた人が、居なくなってるんですよ？あの時ほぼ全員が広間にいたし、誰がこんな一瞬で連れ去る事ができるんですか？」

和真の説明に野口だけでなく、皆一様に黙りこんだ。

卓也さんは一体何処に行ったんだ？

そして、誰がどうやって……

和真は納得のいかない顔で考え込んだ。

「とりあえず広間に戻ろうぜ！ ん……何でこれこんな所に落ちてるんだ？」

野口は蹴破ったドアの陰に隠れていた物を手にとる。

――それはクロバの像だった。

四つあるはずの羽が、今度は左右一枚ずつ取れた状態だった。

そしてその取れた一枚の羽に、白いマジックでこう書かれていた。
——“二人目”と。

菊地

「皆さん……」

佐藤が今頃マスターキーを持ってやって来た。そして、ただならぬ雰囲気と言葉を失う。

「佐藤さん……すいません。ドア壊しちゃいました」

野口が素直に謝った。

「いえ……それより渡辺様は？」

「それが……居ないんです。窓が壊されていて、鍵が開いていました」

美穂は少し震えながらも佐藤に説明する。

「とりあえずこの部屋も保存しておきましょう。ドアが壊れているので、鍵は閉めませんが、皆さん入らないようにしてください」

佐藤の言葉に皆広間へと足を進めた。

和真も広間に戻ろうとして、奥の部屋に目が止まる。

「佐藤さん、そう言えばここは誰の部屋なんですか？」

「そこは菊地様です……そう言えば部屋に戻ったきり見ていないですね」

そう言って佐藤と和真はハツとする。

卓也が居なくなった時、菊地だけは姿を見せていない。

卓也の部屋のドアを壊したんだ。あれだけ大きな音に気付かない訳は無い。

菊地が部屋へ戻ってから、卓也が電話してくるまで約三十分。充

分犯行は可能だろう。

そう思った二人は菊地の部屋をノックする。

——しかし、反応が無い。

急いで佐藤の持って来たマスターキーで鍵を開ける。

そこには、心臓付近にナイフが刺さり仰向けに倒れている菊地がいた。

「えっ!？」

和真の頭は一瞬思考が止まる。

犯人だと思った男が血を流し倒れているのだから。

「菊地様! 菊地様!」

何度も佐藤が呼び掛けるが反応が無い。心臓付近にナイフが刺さっている事からして、おそらくすでに死んでいるのだろう……

視線を菊地から外し、和真は何か犯行の手がかりを求め、辺りを見渡す。

今度は窓にも鍵が掛かっている。

千鶴の時と同様だ。

そして、菊地の物と思われるバッグの辺りには、何枚もの壱万円札が散乱している。

——この人こんな大金を持っていたんだ……って事は金目当てでは無さそうだ。和真はそう感じた。

金持ちの夫婦が事件にあったので、金目当ての可能性もあった。しかし、菊地の部屋にはお金が残されたままだった。

そして、やはり羽の取れたクロバの像が、テーブルの上にポツン

と置いてあった。

万が一指紋を付けてしまつては自分が疑われる。

和真は像に触れないよう恐る恐る近付き、慎重に上から羽を見た。

――三人目。

またもや連続殺人を連想させる文字。

「くそっ……一体誰がこんな事を……」

それに……分からないのは殺害方法だ……

ナイフで胸を刺したのは間違いないだろう。でも、悲鳴をあげられない程、一撃で心臓を突けるのだろうか？

まあこの部屋に隠れていて、タイミングを見計らえば出来なくも無いかもしれない。

だがこの部屋に隠れるには、菊地より先に部屋に入らなければ行けない……

菊地が部屋へ戻ってから、トイレに行った人なら何人かいる。でもトイレとこの部屋は逆方向だ。

トイレに行ったふりをして、この部屋に来る事は無理だろう。

和真はこの部屋をもっとよく調べたかった。しかし、警察には部屋を荒らすなと言われている。

素人が探偵気取りで調子にのつて、解決する事件を迷宮入りにしてしまつては困る。お詫びのしようも無い。

仕方無く佐藤と共に皆の待つ広間へ戻った。

分かった事と言えば、密室の中で菊地が殺され、目的は金では無い。菊地の部屋の鍵は見つけられ無かった。

犯人が鍵を持ち去り、それを使って密室を作った事も考えられる。しかし、それには鍵の掛かった部屋に入れないければ不可能だ。

菊地が部屋の鍵を開け、招き入れた可能性もあるが、今は人が一人殺されている状況だ。余程信頼している相手でなければ部屋に入

れないだろう。

そんな奴いるのか？

いや、今まで菊地と親しくしていた人は居なかった。

やはり部屋に隠れていたのだろう。

例えばクローゼットの中や、バスルームの中に潜んでいて、菊地
が戸を開けた瞬間に胸を刺す。

これなら一瞬で殺せるだろう……

そんな事が出来るのは一人しかない。

しかし……鍵の掛かった部屋に入る方法が全然分からない。

和真は頭を抱えて、考え込んだ。

美穂はそんな和真に、何の言葉も掛けられずにいた。

そんな時野口が近付いて来てこう言った。

「佐藤さんに話は聞いたよ。菊地って奴も殺られたんだって？

でもこれで犯人が絞られたな。

和真君、君の意見も聞きたいんだ。たぶん、犯人はあの人しかない
だろう？」

野口

野口は犯人が分かったと言っている。

和真もおそらくあの人だろうと思っている人はいる。が、まだ確信が無い。

そこで、和真は野口と美穂の三人で話し合う事にした。

つまり、和真は野口を、野口は和馬と美穂を犯人では無いと思っている。

卓也が居なくなった時、菊地が殺された時、どちらのケースでも、この三人はずっと広間にいた。

そう、この三人には犯行は絶対に不可能なのだ。

「それで犯人は誰なんですか？」

美穂が待ちきれない様子で野口に聞いた。

野口はゴホンと軽く咳払いをしてから、ゆっくりと話始めた。

「まず良く思い出してもらいたい。皆誰かの事忘れてないかい？」
そう言って野口は少しニヤついた。

「えっ……」

誰の事を言ってるんだ？

美穂だけでなく和真も驚き、しばらく考えるが分からない。

美穂は指を折りながら一人一人確認していった。

「私と和馬に野口さん、それと秘書の紗英さん。オーナーの佐藤さん。三人が事件にあったから、もうこの五人しか居なくなっちゃいましたよ？」

ここには他に誰も泊まってませんよね？」

美穂は数え終わり、再び野口に尋ねる。

「もう一人居るだろ？ 分かんないならヒントをあげようか？」

野口は、和真達が答えられないのを楽しんでいるようだ。

「早く言ってくださいよ！」

たまらず和真が急かした。

「分かったよ……でもそろそろ十時半になるよな？ 腹減らないか？
朝から何も食ってないし……」

「そんな事より今は犯人を……」

美穂がそう言いかけた時だった。

「あっ！ シェフの人！ そうですよ？」

和真は思い出してそう言った。

色々事件が起きていたから、飯の事なんてすっかり忘れてた。実際そんな食欲無いけど。

確か……名前は佐伯だったか。夕食の時も顔を出さなかったし、一度もその姿を見ていない。

確かにその人なら、なんらかのトリックを使って犯行は可能かもしれない。

皆が広間に居ても、佐伯なら自由に動き回れたはずだ。

和真はそう考えた。

「シェフの人なら、昨日夕食の後に帰っちゃって、今日は雪で来れないんだって！ さっき佐藤さんが言ってたもん」

美穂がそう言うと、野口は驚き黙りこんだ。

「帰ったと見せかけて、実はこの辺に潜んでいたとか？」

「電話番号が自宅のだったらしいので、たぶんそれは無いんじゃないですかね？」

美穂にそう言われ、野口はまた考え込む。

「分かった！ 犯人は紗英さんだ！」

野口は口を開いたかと思うと、今度は紗英を犯人だと言う。

「まず、卓也君が居なくなった時の事だ。あの時紗英さんの携帯が鳴って、皆卓也君の異変に気付いたんだよね？」

でも彼女以外誰も卓也君の声を聞いていない。電話が掛かってこなくても、鳴らす方法はあるだろ？ 例えばアラームを鳴らすとか！ あらかじめ卓也君を拉致し、タイミングを見計らいアラームを鳴らす。そして、皆の前で会話しているように装う……」

「それも無いです。チラッと紗英さんの携帯を見たんです。閉じていても、誰からの着信か分かるタイプのようで、携帯のサブディスプレイ画面に“社長”って出ていましたから。

それに彼女が広間から居なくなったのは、トイレに行った十分程度ですよ？ その間に二人の男を一人で襲うことは無理じゃないですかね」

和真が野口の推理を遮り言った。

「だったら……佐藤さん？」

野口の推理も散々否定され、だんだん適当になってきた。

しかし、まだめげずに“佐藤が犯人説”を言い始めた。

「佐藤さんはマスターキーを持ってるんだから、密室なんてのはすぐ出来るよな？」

それに卓也君を部屋まで送って行ったのは佐藤さんだ。

佐藤さんなら卓也君を襲う時間はあっただろ？

送っていく途中で卓也君を殴り、気絶させる。

そして、違う部屋に監禁しておいたんだ。このホテルの部屋はどこも造りが同じだ。

目を覚ました卓也君が、自分の部屋だと思い込み助けを求める。皆、卓也君の部屋だと思い込み、そこへ向かう。佐藤さんはマスターキーを取りに行くフリをして、別な部屋にいた卓也君を殺す」

「でも……菊地の時は無理なんだよな……」

と最後に付け加えて、佐藤が犯人説を自分で否定した。

検証

野口の推理が一通り終わった後、和真が一つの提案をする。

「部屋に戻って調べたい事があるんです。」

犯人が予想出来ても、密室にする方法や、鍵の掛かった部屋に入る方法がまだ分からないので」

「和真君、その犯人って誰なんだ？ 本当に分かったのかい？」

野口は疑いの目で和馬に問いかけた。

「はい。その人しか犯行は不可能ですから」

和真は自信ありげにそう言った。

「でも現場には入っちゃダメだよ。千鶴さんの部屋も鍵が掛かって
いるし……」

美穂が心配そうに言った。和真が無理矢理事件現場に入ると思ったのだ。

「いや、行くのは自分の部屋だ。ただ、一人で行動するのは極力避けたいんだ。俺が疑われるかもしれないだろ？」

「そんな事言って、ほんとには怖いんだろ？ しょうがない俺も一緒
に行ってやるよ」

ニヤニヤする野口をサラッと流して、三人で和真の部屋へ向かった。

紗英と佐藤を広間に残したままで。

四枚目の羽がまだ残っている事から、後一回殺人が起きる可能性もあった。

しかし、二人でいればとりあえず安心だろう。気がかりではある

が、事件の起きる前に犯人を追い詰めてやる。
そう和真は思っていた。

「まず、気になるのはこの窓だ」
和真達は部屋に着き、窓を開けたり閉めたりを繰り返してみよう。
古びた窓が右往左往する度に、『ガタガタ』と音を鳴らした。

「そんなの調べてどうするの？」
美穂はそう言って、不思議そうに和真の行動を見ていた。

和真は窓を繰り返し開閉した後、今度は「んっ」と上に少し持ち上げてみる。若干浮き上がった窓と、下のレール部分に僅かな隙間ができ、そのまま窓を手前に引く。

「あっ！ 外れた」
予想はしていたが、まさか本当に外れるなんて……和真は自分でも少し驚くが、

「ほらな」と二人に言ってみせた。

「いやいや、鍵が掛かっていたら外れないんだろ？ それじゃ鍵の掛かった部屋に入れないし、何か意味があるのか？」

未だに野口は理解できない様子だ。

仕方無く、和真がこの実験を行なった意味を話した……

「そうか！ 確かにそれなら菊地の部屋に入る事が出来るな。ってそれを出来るのって……」

「そうです！ あの人のしかいません！ この方法で菊地の部屋に潜み、彼を殺したんだと思います」
「そんな……何で？ 動機は？」

美穂は納得がいかない。

まさかあの人がそんな事をする訳が無い。きっと和真の推理は間違っている。

——美穂はそう思ったかった。

「残念だけど、動機は俺にも分からない。俺だって信じられないよ……でもあの人しかこの犯行は無理なんだ！」

和真もまた、自分の推理が間違っていてほしいと思う。だが、現状ではあの人以外に犯人は考えられなかった。

「じゃあ後は密室の謎だけか……どうする？」

うつむく二人に野口が声を掛けた。

「——とりあえず広間に戻りましょうか……」和真は消え入りそうな声で呟いた。

犯人が分かったとは言え、三人にはやるせない気持ちだけが残る。殺人とはそういうものなのだろう……

「そうだ！ 野口さんが千鶴さんの部屋に行った時の事を、詳しく聞かせてください」

和真は広間へ戻る途中も、密室の謎を考えていた。

和真は一番最後に来たので、状況をもう一度聞いておきたかったのだ。

「ああ……うーんと……」

歩きながら野口は思い出そうとしていた。

そんな時、

「あれ!？」

和真は、ズボンのポケットを探りながらそんな声を出した。

「どうしたの？」

「ごめん……携帯落とした」

「バカなんだから……何処に落としたか分かるの？」

「たぶん、さっき部屋の中だと思う……」

和真は小走りで自分の部屋に戻って行った。

「しっかりしてると思ってたけど、案外抜けてる所もあるんだな」と野口は少し笑った。

「何かに夢中になっちゃうと、いつもそうなんです。一つの事しか出来ないって言うか……」

美穂も呆れた口調でそう言い、クスッと笑った。

「待てよ……そうか、それだ！ 分かったぞ、夢中になると気付かない！」

たぶんそれが密室のトリックだ！」

どうやら野口は、密室にするトリックを思い付いたようだ。

密室

「ごめん、ごめん。あったよ」

携帯をかざしながら和真は走って来る。

そんな和真を見る野口の表情は笑顔だ。

「そんなに俺の携帯見付かったのが嬉しいんですか？」

和真は野口の様子に、少し不気味さを感じる。

「違うよ、分かったんだよ！ 密室のトリックが！」

「えっ！ 本当……ですか？」

散々推理を外し続けた野口の言う事だ。

過度の期待は禁物だろうと、素直に喜べない和真。

「疑ってるだろ？ 和馬君の部屋でやって見せようか？」

ニヤつきながら右の掌を出し、鍵を要求する野口。

「鍵を渡してどうするんですか！ これは部屋の中にあったんですよ？」

やっぱりこの人ダメだ、と呆れながら突っ込む和馬。

「いいから貸してあげなよ。私はもう知ってるから」

美穂は和真の居ない間に話を聞いていた。

二対一では、勝ち目は無い。和真はよく分からないが、渋々野口に鍵を預けた。

和真の部屋の前に立ち、野口が説明する。

「いいかい？ まず、千鶴さんの役、つまり死体の役を、美穂ちゃ

んやってほしいんだ。

そして、俺が犯人役、和真君は……和真君でいいや」

「まあそこはいいですけど……」

そして、野口は美穂を部屋の中に入れ、当たり前のように鍵を掛けた。

「いいかい？ リアリティーを大事にね！ 死体を見つけたら、人はどうなるか考えてやってね」

野口が何故そんな事を言ったのか、和真はこの時まだ分かっていた。なかった。

野口は「じゃあ行くよ」と言っ、ドアの鍵を開けたが、「今使ったのはマスターキーだから！」と訂正を加えた。

つまり、鍵を開けたのは佐藤で、彼が持っていたマスターキーを使った。

この時、千鶴の部屋の鍵はまだ犯人が持っている、と言う事になる。

部屋に入ると、美穂が千鶴と同じ位置で、倒れているフリをしていた。

「ほらっ、あれが血を流している死体だったら、君ならどうする？」

野口は美穂を指差す。

和真は美穂が死体だと想像してから言う。

「慌てて駆け寄るか、腰を抜かすでしょうね……」

菊地さんの時は、死体を見るのが二回目だったので、多少周りを

気にしましたけど」

「なんなら駆け寄って介抱してもいいんだぜ？」

「いえ、大丈夫です」と美穂が起き上がり、断った。

「でも、初めて死体なんて見たらビックリだよな？」

そう言って野口は部屋の隅を指差す。

——いつの間に！

和真は驚いた。そこには、部屋の鍵が落ちていたのだ。

「どうやったんですか？」

不思議がる和真を二人は笑った。

「鍵を投げたんだよ」

「は？」

「だから、単純な事だよ。君が美穂ちゃんに見とれている隙に鍵を投げたんだ。このフカフカのカーペットの上だね」

別に見とれていたわけでは無かったが、確かに死体なんて見たら、そっちに気を取られてしまう。

柔らかいカーペットのせいで、投げ放たれた鍵は音を出す事無く床に落ちたのだ。

——単純だが、それ故に盲点でもあった。

犯人

謎は全て解けたかのように思われ、野口と美穂は安堵していた。
——しかし、和馬は一人まだ浮かない顔をしている。

そんな和真の表情に気付き、美穂が声を掛ける。

「どうしたの？ 犯人は分かったし、トリックも分かったんだよ？」

「いや、ちょっと気になる事があって……とりあえず他の二人の所へ行こう」

そう言って広間へ戻ったが、そこに佐藤と紗英の姿は無かった。

「——まさか！」

「犯人に殺られたんじゃ……」

二人が居ない事に慌てる和真達。

「どうしたんですか？ 朝から何も食べてませんでしたよね？」

和真達の心配をよそに、佐藤が食堂の方からサンドイッチを持ってやって来る。その後ろには紗英も居る。

三人はなんら変わらないその様子に、ホッと胸を撫で下ろす。

「心配しましたよ」

佐藤の作る料理がまたサンドイッチだった事は、和馬にとってこの際どうでも良かった。無事でいたのだから。

「皆さん何処かへ行ったので、私達も食堂に行ってたんです。

正直ご飯を食べる気には、あまりなれないんですけどね」

紗英はシェフの佐伯が居ないので、佐藤の手伝いをしていたらしい。

「そんな事より犯人が分かったんです！」

「ちよっと和馬！　せつかく作ってくれたんだから、“そんな事”
って言わないの！」

「今はいいだろ！」

「おいおい二人とも、痴話喧嘩はそれぐらいにして話進めようぜ」

「――そうですね。こんな事してる場合じゃないですよね」

野口になだめられ、二人は喧嘩を止めた。

そして、皆をソファーに座らせ、和真は軽く咳払いをしてから、
犯人の使ったトリックを話始めた。

「まず千鶴さんの密室のトリックですが……」

「あっ！　それは俺が分かったんだけどね」

野口が自慢気に言うので、「そうですね」と和真は軽く流す。

「犯人は鍵を佐藤さんに開けさせ、部屋の中に入る。そして、死体
に気を取られている隙に、カーペットの上に千鶴さんの部屋の鍵を
投げたんだ。

この方法は俺達が実践済みで、俺は鍵を投げられた事に気付きま
せんでした」

「そんな……」

佐藤は驚きの色を隠せなかった。

間接的とは言え、密室作りに手を貸していた事になる。そして、
自分がその時気付いてさえいれば、その後の殺人を防げたかもしれ
ない。そう思うと、情けなさや悔しさやが込み上げてくる。

そんな佐藤を気遣い、美穂が声を掛ける。

「佐藤さんのせいじゃありませんよ。あの状況じゃ誰でもそうなり
ますよ」

美穂の優しい言葉が佐藤の胸に響いた。

「そうですよ、俺は死体が無かったのに引っ掛かりましたから。それで次に菊地さんの時ですが……」

「ちょっと待って、社長の時は？」

今度は紗英が話を止める。彼女にしてみれば自分の社長なのだ。当然気にはなるだろう。

「――それは後で説明します。先に菊地さんの方が先ですから」「どういう意味ですか？」

まだ紗英にはその真意が分からない。

「つまり、千鶴さんの次は菊地さんが殺されたんです。」

そして、その方法が大事なんです」

そう言って、和真は自分の部屋へ皆を誘導する。

「この部屋を卓也さんの部屋だと思って下さい」

説明しながら和真は窓の所へと近付く。

「犯人は菊地さんの窓を割り、鍵を開けて中に入り身を潜める。そして、菊地さんが部屋に入って来た所をナイフで刺したんです」

「待って下さい！ 菊地様の部屋の窓は、確かに鍵が掛かっていましたし、壊れていませんでしたよ？」

それは和馬も自分と一緒に確認したはずだ。佐藤はそう思った。

「だからこうしたんですよ」

和真は先程の要領で窓を外して見せる。

「卓也さんは自分の部屋の窓と取り替えたんです。」

こうすれば菊地さんの部屋の窓は、壊れていない事になりますよね。

つまり卓也さんの部屋の窓は、誰かに割られたんじゃない。“入る為に割ったもの”だったんです」

「そんな……じゃあもしかして犯人って……」

ようやくその意味を理解した佐藤は、驚き哑然とする。

「そうです……卓也さんです!」

「嘘っ! 社長がそんな事するはず無いわ!」

普段は冷静な紗英も少し取り乱す。

「残念ですが、卓也さん以外考えられません。

彼がこの残虐な事件の犯人です!」

——和真が外した窓からは、粉雪混じりの風が入って来た。
まるで犯人の冷酷さのように冷たい風が……

決着

「それで、卓也君は何処にいるんだ？」

野口の質問に和真は首を横に振った。

卓也が犯人だと分かった。だがその行方は未だに分からない。

それとは別に、和真はもう一つの疑問を皆にぶつけてみる。

「卓也さんはこの後どうするつもりなんでしょう？」

「どういう事ですか？」

紗英は少し落ち着いて来たようで、和真の質問にそう聞いてきた。

「俺にも分かったんだ。警察が来て調べたら、すぐに分かっちゃうんじゃないかな？」

「確かに……」

美穂はその意見に納得する。

「考えられるのは……絶対に逃げきれると思っているか、捕まっても良いと思っているかだ」

和真は腕を組み、険しい表情をしている。

「でも逃げるったってどうやって逃げる？ 雪がやめば警察はすぐ来るんだぞ。いや、小降りになってきたし、もう向かっているかもしれない」

野口は自の希望も込めながらそう言った。

「――証拠を消すために、このホテルに火をつけて燃やしちゃうとか……」

美穂は軽い冗談のつもりだった。

しかし、この状況では皆それを真に受けてしまう。部屋の中に緊

迫した空気が張り詰めた。

——そんな時だった。

『バンッ』と勢いよくドアが開く。

皆はその現れた人物に驚き、そして恐怖し、言葉を失う。

——ドアを開けたのは卓也だったのだ。

殺人犯が目の前にいる。

人を殺しているんだ、下手に手を出せば何をされるかわからない。和真をはじめ皆動けなかった。

「安心して下さい。皆さんに危害を加えるつもりはありませんから」
そう言うが、卓也の視線はどこか虚ろだった。

そんな卓也に和真が質問する。

「今まで何処にいたんですか？」

「車だよ」

そうか！

外は吹雪いていて、隠れる場所はないと思っていた。卓也達は車で来たんだった。その事を和真はすっかり忘れていた。

「——それで、何故二人を殺したんですか？」

「それは警察にちゃんと話すよ……」

でもいつからだい、僕が犯人だと分かったのは？」

「おれが最初に違和感を覚えたのは、あなたの部屋に入った時です。そして、紗英さんに電話してきた内容がおかしい事に気付きました」

「電話？　何か変な事言ったかな？」

「あなたは後ろから“殴られた”そう言ったんです。

でも窓の鍵を割られ犯人が入って来たなら、それに気付かず後ろから殴られたのは変じゃないですか？」

「でも逃げる途中で殴られたかもしれないだろ？」

「それは無いと思いました。血痕が血だまりになっていたし、正直争った感じがしませんでした。

それに、逃げる時に後ろから殴られたにしても、それならまず先に犯人の情報を伝えるはずだと思ったんです」

「そうだったんだ……すごいね和馬」

和真があゝの時点でそんな事を考えていたとは思わなかった。美穂は少しだけ和真を見直した。

その後皆は広間に移動した。

卓也は思った以上におとなしく、確かに危険は無さそうだった。

外は、まるでこの事件の終わりを告げるかのように、雪がやんでいた。
これで警察も来れるだろう。皆の表情に安堵の色がうかがえる。

「お茶です、どうぞ」

紗英が佐藤と共にお茶をいれ、皆に渡してくれた。

卓也に聞きたいことは色々ある。

だが、それは警察の仕事だろう。和真はそんな事を思いながら、自分の気持ちを流し込むように熱いお茶を飲んだ。

「グフッ……ゴホォ」

お茶を飲んだ卓也が、突然嘔吐し、痙攣しはじめた。

「どうしたんですか？」

「大丈夫ですか？」

皆それぞれ声を掛けるが、やがて卓也は動かなくなった。

「何でだ？」

卓也さんは逃げ切れないと悟り、自殺をはかったのだろうか。

でもまさかこのタイミングでそんな事をするなんて……

予想外の出来事に、和真は呆然と立ち尽くす事しか出来なかった。

三時間後、ようやく警察が来た。

警察が調べた結果、やはり卓也の犯行で間違いないらしい。

紗英は、千鶴と菊地は不倫関係にあったと証言した。更に、卓也と自分も不倫していたというのだ。

警察はそれを理由に、卓也は千鶴と菊地に脅されていたと結論付けた。

菊地の部屋にあった大量の金とその証拠らしい。

そして、卓也の死は、彼の部屋から遺書と毒物が見つかり、自殺と断定した……

和真と美穂は予定を一日切り上げ、帰る事にした。

殺人事件の起きた場所に長居はしたく無かった。誰でもそう思うだろう。

こうして一連の事件は幕を閉じたのだった。

——帰りのバスの中、和真は美穂にあの時の話を聞いてみた。

「お前……その……Sが好きなのか？」

「ハア？ いきなり何言ってるの？」

「だってほら、千鶴さんと話してただろ？」

そう言うと、美穂の顔は少し赤くなった。

「聞いてたんだ……でもこの事件を解決した“名探偵”とは思えないね」

「どういう意味だ？」

「教えない！」

そう言って美穂は少し笑って見せた。

千鶴は結婚した事で、渡辺千鶴になった。つまり、イニシャルがW・Cになってしまったのだ。

そして美穂もまた、好きな人と結婚すると、S・Mになってしまふ。“S”とはそういう意味だった。

佐々木和馬。彼の名字のイニシャルはS。

和真がそれに気付くのは、まだだいぶ先の事だった……

「なあ、何でクロバの像の羽が黒いか知ってるか？」

そうだ、野口さんと一緒だったのを忘れてた……

「分かりません」

「羽のところだけ鉄で出来ていたんだ。それが見つかった時には、酸化して黒くなってたって訳だよ」

作られた時には綺麗な羽も、時が経てば黒くなる……
まるで人の心のようにだ。

卓也さんも、結婚した時は幸せだっただろう。

それがいつしか殺意が芽生える程憎くなるなんて……

クロバの像に卓也を重ね、和真はふとそんな事を思った。

すっかり晴れ渡った空からは、温かい光がバスを優しく照らしていた。

決着（後書き）

部屋に着くと、バッグの中からメンソールの煙草を取り出す。女はそれに火を点け、大きく吸って煙を吐き出した。

「フフッ」

女は堪えられず、思わず笑ってしまう。

卓也の遺書にはこう書かれていた。

『犯人は私です。ご迷惑をお掛けしてすいませんでした。』

それと、私達には身寄りがいません。

私の会社は全て秘書の紗英に任せます。きっと上手くやってくれるでしょう。

本当にすいませんでした』

※ここからが本当の後書きです！

拙作ながら、ここまで読んで頂き、ありがとうございます！

この話、最初に書いたのは、卓也が居なくなった場面でした。

それに辻褄を合わせるように、前後を書いていったのですが、おかしい点は無かったでしょうか？

今後は背景描写、心理描写等を勉強し、より良い作品を作っていきます！

m (m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0015r/>

クローバーホテル殺人事件

2011年5月7日15時51分発行